

カリフォルニアの風

第2号 令和7年5月13日 発行
サンフランシスコ日本語補習校
校長 相澤 順

4月26日に幼小部サンノゼ校で、5月10日に幼小部サンフランシスコ校で全校朝会がありました。
「学校にはできるだけ休まず来ましょう。先生の話をしっかり聞きましょう。友だちと仲良くしましょう」と、小学部の入学式で新入生に伝えたことと同様の内容を、それぞれの全校児童（幼児）にも話しました。また、「高学年児童の皆さんを中心に、補習校での目標を定めて粘り強く取り組んでいくことが大きな成長につながります」ということ、さらには、「友だちと仲良く過ごす第一歩は、挨拶を交わすことです。『おはようございます』『ありがとうございます』『ごめんなさい』などと日本語でしっかりとと言える人になってほしいです」と、伝えました。

児童会のメンバーがすすんで司会進行をしている姿、運動会に向けてラジオ体操委員（係）が体操隊形を全校児童にしっかりと伝達し、ラジオ体操の練習をしている姿など、児童が自ら役割を自覚して活動していることは大変立派です。

両校とも、運動会を目の前に控え、幼稚園では、幼児の皆さんが初めて運動会の練習に臨む微笑ましい姿が見られたり、各学年（部）では、出場競技の練習等が行われたりしています。多くの幼児・児童が意欲的に取り組んでいる様子から、運動会本番が本当に楽しみになりました。



【きちんと順番にかけっこの練習ができました！：幼小サンノゼ校】



【全校朝会后、ラジオ体操の練習をしました：幼小サンフランシスコ校】

5月3日は幼小部2校ともに学校生活参観と学級懇談会がありました。頑張っているお子様の学習の様子を見ていただいたり、学級懇談会で担任の学級経営や学校運営の方針などを理解していただいたりしたことと思います。また、各学年で、新しく補習校に入られたお子様の保護者の方をはじめ、保護者同士で困り感などを共有できたことも良かったのではと推察いたします。

（4校ともに）1日中、学校の様子を見ていると、子どもたちが多くの保護者の方のご協力・ご支援を受けていることに気づかされます。各校のランチ、ヤード、図書、IT、交通安全・駐車場などの当番や委員会を担っていただいている保護者ボランティアの皆様には、子どもたちの安全・安心のために、学習環境の充実のために、貴重なお時間をいただき様々なお力添えをいただいていることに心より感謝いたします。

今年度より小学部4年生以上では、教科担任制での授業を始めたところです。教科担任制は「多くの教員が子ども一人ひとりとかわることへのメリットは大きい」と日本では推奨され、広がりつつあります。本校の児童たち、指導に当たる教員の方々も慣れるまでには、しばらくは時間がかかるかと思いますが、本校でできる効果的な教科担任制を目指してまいります。

また、中高部も含め、様々、ご意見をいただいている「振り返りタイム」についても、実施からようやく一年が経過したところです。教科ごとや学年ごとで、工夫や改善をしながら取り組んでいます。

こちらも定着し、ある程度の成果が見られるまでには、今しばらく時間が必要になります。

これらの取り組みが、子どもたちの学力向上推進や、主体的に学びに向かう態度の育成につながっていくよう、引き続き努力をしてまいります。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

「夢に向かって」

教頭 和地 恵美

初めまして。教頭の和地恵美（わちえみ）といいます。どうぞよろしくお願いいたします。

補習校の皆さんは、金曜日まで現地校で頑張り、さらに土曜日に補習校での勉強に来ていて、本当に素晴らしいと思います。応援の気持ちを込め、小学部では、人気のピカチュウの絵を見せながら「言葉が通じると、さびしくなくなる」という話をしました。中高部では、以下のような話をしました。

私は、自転車競技の選手でもあるので、その縁で、東京2020パラリンピックの時に、3週間、選手と共にパラリンピック村で過ごしました。今日は、その時の話をします。

とにかく感動の毎日でした。皆さんもご存じのことと思いますが、パラリンピックの選手なので、目の見えない人や手や足がない人が参加しています。でもみんなとても明るく活気にあふれていました。何でも自分の力でやろうとします。

例えば、骨肉腫になり、命をつなぐためには脚を切り落とさなければならない、といった究極の選択があり、それを乗り越えてまたスポーツを楽しめる喜び。あるいは生まれながらにして何か障害がある場合は、辛いこともたくさんあったでしょうに、今、国の代表として東京に来ている誇り。そういった想いをひしひしと感じました。その中で、電動車椅子に乗った女の子のことが、一番印象に残っています。彼女と仲良しになり、最後の日に、「またパリパラリンピックで会いたいね」というと、彼女は「エミ、ごめんね。その約束は果たせそうにない」と言うのです。「なぜ？」と聞くと「私は筋肉にどんどん力が入らなくなっていく病気なの。だから、3年後は、心臓も止まっていると思う」と。「最後の最後に東京に来て、本当に嬉しかった。このコロナ禍で、勇気をもってパラリンピックを開催してくれた東京のみなさんに、心から有難うと言いたい」と。

私は言葉もありませんでした。

命には限りがあります。でもいつなのか分からないので安穩と過ごしているし、それはそれで幸せです。でも、リミットを分かって、その命をいつくしむように、毎日を大切に生きている彼女の言葉に、「自分は何をやっているんだ？」と、頬を張られたように感じました。そして、若い時に「海外には日本語を学ぼうと頑張っている子たちがいる、何とか力になりたい」と強く願ったことを思い出し、チャレンジをしました。ここまで来るのに、40年かかりました。

皆さんには、夢はありますか？ 夢は、自分から手放さない限り、いつか叶えることができると思っています。遠回りをしてでもいいし、時々休んでもいい。楽しく夢を追ってください。応援しています。



新しい出会いに感謝しています。尽力いたしますので、幼児・児童・生徒の皆さん、保護者の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。